

SHOW HEY シネマルーム

★★★



Data

監督：ダグ・リーマン
出演：マット・デimon/フラン
カ・ポテンテ/クリス・ク
パー

👁️👁️ みどころ

マット・デimonが演ずるCIAのスパイはプロ中のプロ。しかし彼は「独裁者」暗殺に「失敗」した挙句、記憶を失ってしまった。なぜ俺は6つの名前と6カ国のパスポートを持っているのか？その記憶を取り戻そうとするその男に危険が迫ってくる・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<スパイ映画の主演はマット・デimon>

この映画の原作は、ロバート・ラドラムが1980年代に発表したスパイ小説『暗殺者』とのこと。主演はジョン・マイケル・ケイン、ケイ・ポール、ジェイソン・ボーンなど、6つの名前と6カ国のパスポートを持つ男。そして武器の扱いや戦闘能力さらには記憶力やとっさの判断力にずば抜けた能力を持っている男だ。しかし、嵐の地中海沖で、イタリアの漁船に助け出されたこの男は、自分が何者かについて完全に記憶力を喪失していた。こんなスーパーマン・スパイを演ずるのは、『グッド・ウィル・ハンティング/旅立ち』、『レインメーカー』、『プライベート・ライアン』、『ラウンダーズ』、『リプリー』で次々と主演をこなし、その存在感を年々増幅させているマット・デimon。ほとんど彼の1人舞台ともいえる映画だ。

<ストーリーは割と単純>

男は記憶を失っていたが、身体の中に埋めこまれたカプセルの中には、スイスのチューリッヒ相互銀行の口座番号が印されていた。これを手がかりに、男は自分の正体を捜し出す行動に出た。銀行の貸し金庫の中からは、①6つの名前と6カ国のパスポート、②大量の現金、そして、③拳銃が入っていた。一体自分は何者なんだ・・・？

そんな男に警察官の影が……。しかし男はなぜかこれを察知。乱闘の末、追跡をかわして逃走する。すべての技術はプロ級だ。しかし、自分はなぜ狙われているのか？また誰から狙われているのか？男にはそれは全くつかめなかった。

<男の任務は何だったのか？>

スパイ映画、スパイ小説の醍醐味は、本当はこのテーマにある。アメリカCIAは、独裁国家の独裁者を暗殺することを公然と1つの国家目標として掲げている。9・11テロの主謀者と目されているオサマ・ビンラディンやイラクのフセイン大統領は、目下その最大のターゲットだが、過去にもソマリアのアイディード将軍など、その標的はたくさん存在していた。従って、「世界の憲兵」、「民主主義の砦」を自負するアメリカや、その情報戦を担うCIAにとっては、特殊な訓練を積んだスパイを送り込んで、これらの標的を倒すことは絶対的な「善」であると信じられている。このことの当否は別として、こういう現実の存在が面白いスパイ小説やスパイ映画を生む土壌にあるわけだ。

そしてこのような任務を与えられた特殊スパイが、この任務に失敗した時はどうなるか……。？当然、話は少しややこしくなってくるはず。さらにその男が自分に与えられた任務や、自分が取ってきた行動についての記憶を喪失しており、このことを指令した側のCIA本部のテッド・コンクリン（クリス・クーバー）が把握できていないとすれば……。さらに多くの混乱が起こるのは当然だ……。

<相棒の女優はもう一つ>

男の逃走を手助けするのはスイスのアメリカ大使館で偶然知り合った女性マリー（フランカ・ポテンテ）。その後ずっと男と行動を共にするが、残念ながら、この女優にはあまり存在感がない。ドイツ人女優だが、ぐっとくる魅力に乏しいのが残念。

面白いのは彼女が乗る赤のミニカー。『トランスポーター』や『007/ダイ・アナザー・デイ』での派手なカーアクションは、特殊な車の性能を前提とした「見せ場」だが、何せミニカーは大した馬力のない低排気量の車だ。男がこのミニカーを巧みに操って、追跡するパトカーとの間で繰り広げるカーチェイスの場面は王巻で面白い。

<まとめ>

マット・デイモンはこの映画の役作りのために、筋肉を鍛え上げ、マーシャル・アーツの格闘技を学んだとのこと。格闘シーン（殺陣シーン）の見事さという点では、「たそがれ清兵衛」で見せた真田広之の小太刀での決闘シーンには到底及ばないものの、マット・デイモンの格闘シーンはそれなりに迫力があり、マット・デイモンの役者としての可能性の高さを感じさせてくれる。

その他、全体としてマット・デイモンの魅力は十分に発揮されているが、やっぱり基本的なストーリーづくりに無理がある。これは1980年代に書かれたスパイ小説を今風にアレンジして映画化したという点が原因だろう。もう少し工夫が欲しかった・・・。

2003 (平成15) 年4月8日記